

中学生のケータイ利用

弘前大学人文学部准教授
羽瀨 一代

1. はじめに

現在、日本のケータイ利用人口は約8割に達している。若者でケータイを利用しない人を捜すことは難しくなったし、年端のいかない中学生ですら、その所有率は高い。

内閣府のおこなった情報化社会と青少年に関する意識調査(2006)によると、全国の中学生のうち約6割がケータイを保有し、インターネットを利用している。また、東京大学大学院情報学環の調査(以下、東大調査)によれば、東京23区の中学2年生の75%がケータイを利用しているとのことである(橋元, 2007)。この利用の中心が、「友人たちとのコミュニケーション」であり、主にメールでやりとりされている(橋元, 2007)。

多くの若者は、肌身離さずケータイを持ち歩き、就寝時に枕元に置いておくことを当然の行動としており、場合によってはお風呂にまで携帯する。なぜそこまでケータイに執着するかというと、先述したように友人たちとのコミュニケーションに利用されているからである。ケータイによるコミュニケーションとは、メッセージの内容のみを指し示すわけではない。メールを受信した場合、よほどのことがない限りすぐに返事をださなければ、そのこと自体が意味をもってしまう。「即レス」がなかった場合、メールを出した相手との関係に何か問題がある、もしくは受信者にとって、

メールの内容が気分を害するようなものだったということの意味してしまう。したがって、送信した友人を気遣い、「即レス」を若者たちは心がける。何かあって、「即レス」できなかった場合、若者たちはきちんと理由をつけて謝罪することが多いようである。

中学生のデータではないが、18歳から24歳までを対象とした世界青年調査の結果から、近年の若者の友人関係は良好な関係を保つ傾向にあり、満足度も高まってきている(図1)。また、相談相手として「友人」を挙げる若者が非常に多いこともわかっており、このためのツールとしてケータイが使われていることは想像に難くない(図2)。現代は、「友人関係に没頭する若者」という様相をより強めている印象がある。これらのデータから若者の友人関係は濃密化しているという社会学者もいる(浅野, 2007)。

先述の東大調査によれば、ケータイを利用している中学2年生のうち98.7%がメールを利用している。そして「ほぼ毎日」学校の友だちとメールのやりとりをしている者が53.3%いて、1日あたりの平均で約26通のメールをやりとりしていることから(橋元, 2007)、中学生の友人関係も濃密化しているという仮説が導きだせるだろう。

2. 子どものケータイ利用に対する警戒

若者の友人関係の濃密化とともにケータイ利用の低年齢化が進むなか、多くの地方公共団体は、子どものケータイ利用に対して、「何かしなければならぬ」といわんばかりに、啓発パンフレットを作成し、研修会を開催するようになった。この問題意識は、ケータイを利用したネット上の匿名コミュニケーションが引き起こす犯罪から子どもたちを守らなければならない、という使命感に導かれている。こうした動きは2004年以降に顕著になるのだが、その際、ネット・コミュニケー

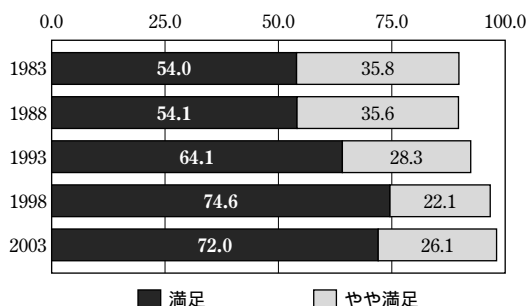


図1 友人関係の満足度(世界青年意識調査)

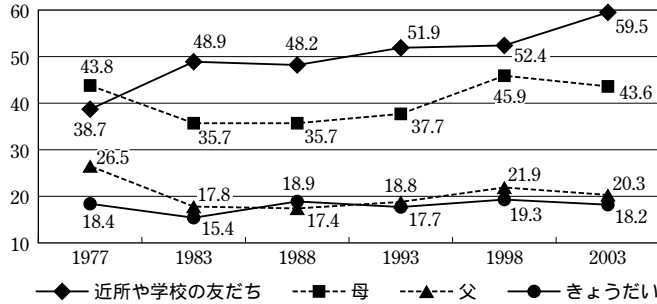


図2 悩みや心配ごとの相談相手(世界青年意識調査)

ションと関連する事件は2000年から2003年までに大幅に増加した、と喧伝されたのである。

ネット・コミュニケーションにはさまざまなリスクがつきまとっている、と考えられているが、そのもっとも強大な敵として、出会い系サイトがある。警察庁の啓発サイトでも、「名前を隠して異性と知りあうことのできる『出会い系サイト』。凶悪犯罪の被害にあう少年少女が増えています」と警告している。中学生まではケータイを所持しないように呼びかける地方公共団体もある。

警察庁によれば、出会い系サイトを利用した犯罪は2004年で1582件であり、内閣府の調査によれば、1310人が被害にあっている。実際には、2002年からほとんど件数は増えていない。青少年の犯罪被害は年間で約35万件あるが、そのうちの1300件程度を多いとみることができるかは疑問である。インターネット登場以降、青少年の犯罪被害が劇的に増加し、その増加分がインターネット上の出会い系サイト関連の犯罪であるならば、「ネット・コミュニケーションによる犯罪の急増」を「問題化」することに理がある。ところが、犯罪被害の総量は増えていないのであるから、新しいメディアの出現と犯罪との関係はないに等しいといわざるをえない。

そして、おそらく、出会い系サイトを代表としたケータイ利用の被害率の問題よりも、もう少し賢い利用を中学生たちはおこなっているはずである。つまり、生活上のささやかなリスク管理に、ケータイを使っている現代の中学生たちは神経をとがらせている。

3. ケータイを持たせる親

ケータイを子どもにを持たせるか、持たせないか。

この選択は、子どもを持つ大人たちの多くが悩む問題である。親たちは、社会問題になるようなケータイ関連の事柄を憂慮するいっぽうで、ケータイを子どもに持たせてリスク管理をしたいと思っている。東大調査のデータを分析した松田美佐(2007)によれば、中学生のケータイの利用/非利用は母親ケータイの利用/非利用と関連している。つまりケータイを利用している母親の子どもはケータイを利用する率が高い。また一般的な子どもに対する母親の意識と子どものケータイ利用が関わっているという(図3)。

この結果から読みとれることは、ケータイを子どもに持たせている母親は、持たせていない母親よりも子どもに対するコミットメントが強く、非利用者のほうが子どもに対して「子どもであれば、少々悪いことをしても仕方がない」という意識がうかがえる。

今の中学生は、小学校時代からケータイを利用している者も少なくない(39.5%)。それでは、どんな親たちが小学生からケータイを持たせているのか、東大調査のデータの分析結果(松田, 2007)をもとに説明していこう。

まず小学生からケータイを利用させている母親

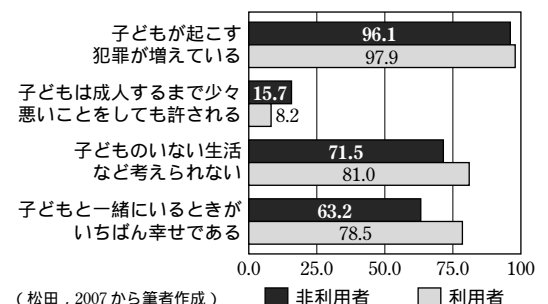


図3 子どものケータイ利用と母親の意識

は、母親自身のケータイ利用開始時期が早かったという特徴があげられる。そして、専業主婦が多く、世帯収入が高く、学歴が高く、教育熱心という特徴があげられている(松田, 2007)。また小学生からケータイを利用している中学生は、国立、もしくは私立の中学校に通っている率が高く、中学受験のための塾通いをしてきた経験を小学校時代にもっているのではないかといふ(松田, 2007)。これらのことを鑑みると、比較的富裕層の教育のコストとしてケータイ利用はなされているといえよう。

くわえて親が子どものケータイ利用についてどのように考えているのか確認しておきたい。2005年に(社)日本PTA全国協議会がおこなった「子どもとメディアに関する意識調査」によれば、子どものケータイ利用について親が心配していることは「無制限に使ってしまい使用料金の無駄遣いをする」ことである(50.6%)。つまり、親の子供に対するメディア利用に関する心配事は、そのコミュニケーションスタイルや内容にあるというよりも、経済的なことにあるといえる。実際、子どもを持つ親たちは、子どもがどのようなコミュニケーションをおこなっているのか、それほど心配する必要はないと考えているのだろう。

4. スクールカウンセラーの悩み

つぎに学校現場でのケータイ利用に関わる問題について考えていこう。ここでは、ネット・コミュニティが形成される以前のメール・コミュニケーションについて焦点をあてる。基本的に、ケータイを学校に持ってくることを禁止している中学校は、いまだに多い。しかし、前述したように、中学生の過半数がケータイを所持している以上、それを学校に持参していないということは考えにくい。親は、塾や課外活動で遅くなる子どものセキュリティのために、規則違反を承知でケータイを持たせている。したがって、表向き、中学生はケータイを利用していないことになっているが、実際にはケータイメールの利用は頻繁になされているといわれている。学校によっては、禁止しているにもかかわらず、教員とのメールのやりとりをする中学生や、スクールカウンセラーにメールアドレスを尋ね、メールで相談してもいいかと尋

ねる中学生もいるということである(羽淵, 2007)。

教員やスクールカウンセラーが例外的にメールのやりとりをする場合は、中学生の側に問題があったとき、メールでならばコミュニケーションが可能なため、仕方なくおこなっているといわれている。中学生のケータイの利用法について、どのように考え、アドバイスをしていいのかということが、心のプロである彼らにとっても悩みの種となっている。

メールは、基本的にそのアドレスを簡単に変更することができる。したがって、1日だけdarekasan@xxx.ne.jpというメールアドレスにすることも可能である。そういった短い間だけ、誰にも知らせていないアドレスを使って、クラスの全員に同じクラスの気に入らない子の中傷、誹謗メールを送り、その後、すぐにメールアドレスを変えてしまうという事件があった。その被害者が、親に訴えたことで、親が学校に対して、その犯人を捜すことを要望し、学校と親と児童を巻き込んだ大騒動が起こった。結局、加害者は特定されなかったが、加害者だと目された児童が不登校になり、結果的に転校処置となった(羽淵, 2007)。

また、義務教育中の子どもばかりではなく、T大学のスクールカウンセラーによれば、保健管理センター内にある学生相談室にカウンセリングを受けにくる学生の相談に、ウェブ上での誹謗、中傷による鬱状態や自殺未遂などが頻発しているという。このような事例から、匿名性によるネット・コミュニケーションの問題というよりも、匿名的な空間で既知の親密な人間関係の問題が起こっているといえるだろう。

5. 知らない人は怖くない

これまでケータイの問題というとインターネット上の「出会い系サイト」に関わる知らない人との相互行為にまつわるものだというイメージが強かった。しかしケータイの利用行動を調べれば調べるほど、その行動は親しい人とのあいだでおこなわれるコミュニケーションを特徴としており、新しい人間関係への扉ではないということがわかってきた。

翻って、新しいメディア利用という視点を取り

除いても、犯罪や問題は、知らない人とのあいだに起こることは極めて稀である。殺人事件や誘拐といった凶悪犯罪なども、全く見ず知らずの人が犯人であるということは滅多にない。つまり、現在青少年問題の焦点になっているメディアは、問題であるというよりも、青少年のもつ親密性に関わる現象を可視化させる補助的道具と考える方が正しいであろう。

たとえば、日本性教育教会がおこなった2005年の調査によれば、携帯メールの利用と異性の友人の有無に関連がみられる(高橋, 2007)。携帯メールの利用は交友関係全般を活性化させ、その一部として異性との交友関係もサポートすると考えられる。

ここまで来ると難問に直面してしまう。つまり、そもそも親密な人間関係を築くことが悪いことなのかということである。おそらく、若者だけでなく、現代は親密性に没頭する時代だといえる。イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズは、現代社会の対人関係が徹底的に過去のものとは異なる状況に変貌していると指摘している(ギデンズ, 1995)。

ギデンズによれば、これまでの対人関係は、多かれ少なかれ制度に支えられた関係として成立していた。それは、生活経営の必要性から成立する役割関係や、旧来の差別的な男女関係に特徴的な権力関係にあてはめられた役割関係をモデルとしたものであった。しかし、近代社会が成熟し、女性の社会的地位が向上し平等化が進むことによって、これまでの権力関係にもとづいた親密性ではなく、親密であることそのものを目的とした対人関係が成立してきたのである。言い換えるならば、「仲良くすること」を目的とした対人関係が、プライベートな領域における関係性の最大の目的となってしまったといっても過言ではない。

制度に支えられない親密性は非常に脆弱であり、個人にとって危険なものである。それは、親密であることを目的に関係性を形成する場合、人格をかけて関係性を作らなければならないが、相手に関係性を拒否される可能性をいつもはらんでいるからである。人格を掛け金として積まなければ、親密さを醸成することは難しい。ところが、これが意味することは、関係性の破綻が人格への

否定につながるということである(ギデンズ, 1995)。

対人関係を束縛する制度がないということは、関係性そのものからの離脱がいつでも可能だということの意味する。そして、個人が関係を放棄する自由を獲得しているということは、翻って、相手の気分が変われば、相手からもいつでも関係を棄却されるという不安定さを抱えている。気分や感情に支えられた関係性は、経済的なものや権力関係の役割に支えられた関係性よりも脆弱であり、個人にとっては不安なものである。家族、地域共同体、宗教などといった対人関係に関わる不安を解消してくれる制度が揺らいでいる場合、個人の責任においていつでも対人関係のメンテナンスをしなければならない。このメンテナンスに失敗すると、自己の存在を危うくするという状況に現代人は陥っているのである。

こういった状況のなかでケータイは役立つ道具となる。メールのやりとりやいつでもどこでも電話が可能であるということは、絶え間なく対人関係のメンテナンスをおこなうということと同義だとも考えられるのである。

参考文献

- 浅野智彦, 2007「大学生の友人関係」全国大学生協連合会「学生の意識と行動に関する研究会」第5回研究会配布レジュメ
- Giddens, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*. Polity Press. (松原 精文・松川昭子訳, 1995『親密性の変容 - 近代社会におけるセクシュアリティ, 愛情, エロティシズム』而立書房)
- 高橋征仁, 2007「青少年のメディア接触と性行動」第50回日本 = 性研究会議シンポジウム『情報化社会の中で変わる青少年の性行動』発表要旨
- 橋元良明, 2007「調査の概要と主な知見」坂村健・橋元良明編『ユビキタス社会のケータイ利用と親子関係』21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」「ケータイ調査チーム」平成19年度研究成果報告書
- 羽淵一代, 2007「ネット・コミュニケーションの現在」富田 英典・南田勝也・辻泉編『デジタルメディア・トレーニング』有斐閣選書
- 松田美佐, 2007「母親と子どものケータイ利用」坂村健・橋元良明編『ユビキタス社会のケータイ利用と親子関係』21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」「ケータイ調査チーム」平成19年度研究成果報告書